

ある喪失の物語、あるいは物語の喪失

大作『法話の帰り道』とその運命

稲賀繁美

クールベの数々の大作のなかで、奇妙にも今日の美術書にはまず登場しない作品がある(参考図版①)。それがどんな作品だったかはおいおい分析することとして、まず最初にその大作が出品された、というより出品され損なった環境を復元することから始めよう。時は一八六三年といえ、フランス近代美術史に通じた読者なら先刻ご承知の、かの歴史に残る「落選者展」の年、と来るのが普通だろう。この年のサロン—当時の画家にとって唯一の作品発表の機会—には五千点を超える出品応募があつたが、審査は峻厳を極め、入選したのはわずか二七八三点。落選した画家たちの非難を懐柔すべく皇帝ナポレオン三世の肝煎りで「落選者展」が開催され、これを出発点に画家たちはこの先、国家権力から自由と独立とを求めてゆくことになる……。これが、美術史教科書の常識的な記述である。

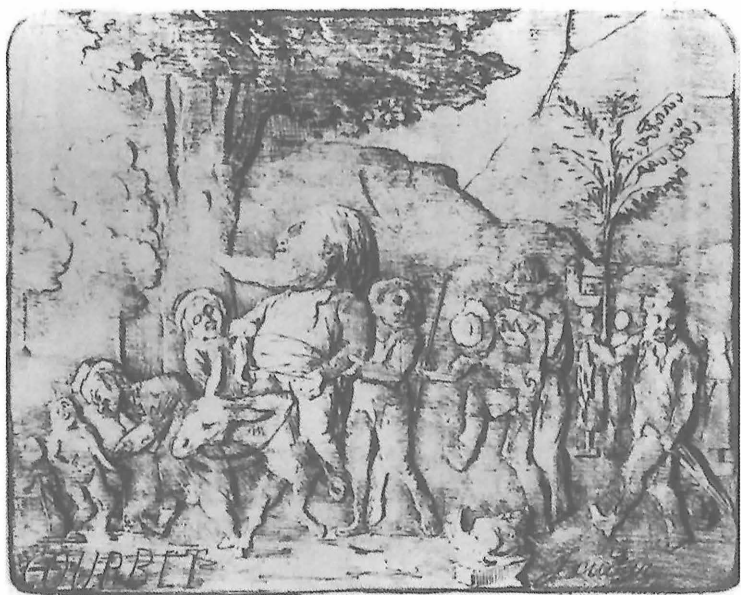
この落選者展の英雄として後世に名を残すこととなるのは、ほかならぬエドゥアール・マネ。その問題作『草上の昼食』が落選者展でスキヤダルを巻き起こした、というのが通説だ。ところが、わざわざ当時の展覧会評を発掘して読み直す労を取ってみると、マネ

が問題作を発表して話題を撒いたのは事実としても、それが醜聞だったとは容易に信じがたい。件の「通説」、実は二十世紀初頭に『マネ伝』を著した友人テオドール・デュレの気まぐれと出来心から生まれ落ち、当のデュレご本人も思っても見ないまでに人口に膾炙して世に蔓延^{ひろが}ったひとつの「神話」ではなかったか。これが、筆者年来の疑念である。

さてそこで、かのクールベの問題の大作だが、『法話の帰り道』なるこの作品、この年のサロンに落選したのみならず、落選者展からも落選した、という不思議な経歴をもつ、希有な作品である。落選者展からの落選もむべなるかな、と言うべきで、そこに描かれているのは、真つ昼間から天下の公道で泥酔して悪ふざけしている、醜態にして滑稽なる田舎の坊様たちの姿であつた。信仰篤いスペイン王家から招かれたウジェーヌ皇后に取り入つて、当時権勢を思うがままにしていたカトリック聖職者たちの度し難い腐敗ぶりを揶揄する舌鋒も辛辣な、いかにもクールベらしい冒瀆的で挑戦的な題材だ。サロン落選となることで、かえって世間の注目を惹こうとする、画家の政治的な下心すらも、露骨なまでに透けて見える。



参考図① クールベ『法話の帰り道』1862年(現存せず)



参考図② ジュダール『法話の帰り道』「驢馬」誌掲載のカリカチュア 1863年

そもそも、その制作のための環境整備にも、クールベの悪巫山戯^{わるまがけ}ぶりが露呈する。縦横三メートルを超すこの大作制作のため、画家は格好の場所を捜し出す。当時フランス南西部の都市サントに滞在していたかれは、そこで予算不足のため建設途上で放置されていた、国立種馬飼育場の所長公邸の使用許可を取り付ける。もちろんどんな絵を描くかは秘密にしたまま、このアトリエに籠ったクールベは、国家の庇護の下、国家の不注意に付け込んで、国家の怒りを買う禁じられた表象を、堂々と—そしてこっそりと—鋭意制作することに励んだ、というわけだ。おそらくクールベの胸中には二年前の屈辱が去来していたであろう。一八六一年のサロン出品作『牡鹿の闘い』によってレジオン・ドヌール勲章受勲まちがいなしとの風評が立ちながら、結局は沙汰止みに終わった。裏で密かに筆を取ってリストからクールベの名前を抹消したのが、ほかならぬナポレオン三世だった、との噂も、まことしやかに流れていた。その皇帝の鼻をあかせて仕返ししてやろうとの魂胆が、



参考図③ ベナッシ 『現代画家たちのアトリエ
開きを挙げる画匠クールベ』「フルパル」誌
掲載のカリカチュア 1862年



参考図④ アゴスティノ・ディ・ムージ・ベネチアーノ
『酔いどれシレーノスの道ゆき』銅版画 ベルリン
国立プロイセン文化財博物館銅版画室蔵

だったのだ。

とすれば、クールベのこの「挙行」にどこか演劇的な「虚構」が感じられるのも当然かも知れない。いやそれどころか、この絵にはもともと演劇仕立ての下敷きが、いわば「原光景」として存在していたらしい。サントでクールベに宿を提供していた、デュレの従兄エティエンヌ・ボードリーの証言によれば、クールベは当時サントに滞在していた劇団の一座に掛け合っで一舞台設けたらしい。どんちゃん騒ぎの酒宴で色男ぶりをみせつける馬鹿な自惚れ者の役を買ってでたクールベは、驢馬にまたがったの行進で得意の乗馬の腕前を披露した。だが、かわいい金髪の太めの女の子にちょっかいを出すうちに、猿も木から落ちる道理で驢馬から転落し、脳震盪を起こす。噂はパリにまで広がって、クールベは中風で再起不能か、とまで取り沙汰された。この大失態を敵方のカトリックの坊様に転嫁して、驢馬に跨がる酔った司祭長姿に仕立てた風刺画が、件の大作の正体だったのではあるまいか。

同時代の人々が『法話の帰り道』の太च्छ司祭長にクールベの変装を認めていたことは、ジュダールの風刺戯画にも明らかで、驢馬の背の人物はクールベのトレード・マーク「アッシリア風」の髭をなびかせている(参考図版②)。先に触れたアトリエ開きを風刺した戯画にも、大筆を槍、パレットを盾に見立てた、セント・ジョージならぬ聖クールベが、一党を引き連れてバリ画壇制覇に進軍する図、というのが知られている(参考図版③)。自分を揶揄するこのカリカチュアを焼き直したパロディが『法話の帰り道』へと転生したわけだ。さらには『酔いどれシレーノスの道ゆき』(参考図版④)という神話画が下敷きとなれば、クールベは古代異教の図像をキリスト教化し、現代の宗教画へと復活させる術まで心得ていたことになる。虚実入り乱れたこの神話的空間を利用し、自己嘲笑を逆手に取って巧妙にも教会罵倒の毒舌へと転嫁したクールベは、照れ隠しと同時に歴史(画)的な寸法の反宗教画を実現し、「ウジェーヌ皇后を卒倒させよう」と狙ったわけである。

意外な偶然だが、先に触れたテオドル・デュレはサントの出身で、クールベのサント滞在中、その言行に親しく接していた人物である。『法話の帰り道』の中央には、太च्छ司祭長の重みに悲鳴をあげる驢馬がいるが、クールベがこの驢馬をアトリエに運び込んで写生するために、足場やら滑車やらを動員していかなる大騒ぎを演じたかを、デュレは『クールベ伝』(二九一八年)に淡々と記録している。思えばそれより二年前、パリのノートルダム・デ・シャンにアトリエを開いた折りにも、生きた牡牛をモデルに待んで世間を驚かせ、新聞種を提供し、自己宣伝にこれ努めていたクールベである。サントの驢馬騒動も、お得意の自作自演のお芝居の、いわば二番煎じだった。「自然への忠実さ」こそクールベの信条だったとデュレはひたすら主張するのだが、実際それは人為と強制による「やらせ」

『法話の帰り道』は落選者展からも落選したが、この隠された醜聞は今では歴史からも抹消された。一八六三年の英雄としてマネを要請した歴史は、(宗教画、歴史画といった)物語絵画の終焉を説き純粹造形の自律を謳う物語でもあった。その文脈では、『法話の帰り道』の醜聞は、もはや醜聞として語られること自体が醜聞となりかねない、時代遅れな事件でしかなかったのである。この作品は今世紀のはじめにさるカトリック信者が破壊する目的で買い取ったといわれ、以降行方は杳として知れない。いわばこの作品は、みずからの消滅によって、宗教画の終焉を身をもって演じた。そしてその消滅の物語は、政治の審美化と審美化の政治の狭間で、物語としても消滅する運命にあったのである。(本稿は『日仏美術学会会報』第九号の改訂版である)

(いなが・しげみ 三重大学助教授)

クールベ

1993年10月
©朝日新聞社

作 品

- ① ナアンの橋 (オルナン)
- ② 妹のジュリエット
- ③ 恐怖に気の狂った男 (絶望した男)
- ④ 傷ついた男
- ⑤ ハンモック
- ⑥ ジュリエット・クールベの肖像
- ⑦ 田園の恋人たち (ジュスティエヌとギュスターヴ)
- ⑧ ボードレールの肖像
- ⑨ オルナンの食休み
- ⑩ 夕立時のルー川の谷間
- ⑪ パイプをくわえた男 (自画像)
- ⑫ 石割り人夫 (習作)
- ⑬ 市から帰るフラジェーの農民たち
- ⑭ エクトール・ベルリオーズの肖像
- ⑮ 火事に駆けつける消防士たちの出発
- ⑯ オルナンの埋葬
- ⑰ 画家のアトリエ
- ⑱ オルナンの小さな谷間で牝牛の番をする少女に施しをする村のお嬢さんたち
- ⑲ レスラーたち
- ⑳ 水浴びする女たち
- ㉑ 眠る女
- ㉒ まどろむ糸つむぎ女
- ㉓ シャンフルーリの肖像
- ㉔ 死女の化粧
- ㉕ 出会い
- ㉖ スペイン婦人の肖像
- ㉗ 物思うジプシー女
- ㉘ 麦をふるう女たち
- ㉙ 花束
- ㉚ セーヌ河畔のお嬢さんたち、夏
- ㉛ 雪の中を駆ける鹿
- ㉜ 獵犬の分け前、ジュラ山中の森林での鹿獵
- ㉝ フランクフルトの婦人
- ㉞ 狩獵の食事 (ピクニック)
- ㉟ ドイツの獵人
- ㊱ 女羊番
- ㊲ 黒い帽子の婦人 (ロール・ボローの肖像)
- ㊳ 蔓棚 (花をととのえる娘)
- ㊴ フラジェーの櫛の木
- ㊵ グール・ド・コンシュ
- ㊶ ルー川の源泉
- ㊷ ビュイ・ノワールの溪流
- ㊸ 女と猫
- ㊹ ベアトリス・ブーヴェの肖像
- ㊺ 川辺の鹿
- ㊻ オルナン近くの風景
- ㊼ 窓による 3 人の英国娘
- ㊽ 1853年の P. J. ブルードンの肖像
- ㊾ ウーフラジー・ブルードン (旧姓ピエガール) の肖像
- ㊿ ポドスカーフに乗る婦人
- 1 美しいアイルランド娘ジョーの肖像
- 2 女とおうむ、パリ
- 3 目覚め (ヴェニユスとプシケ)
- 4 眠り
- 5 乾草の季節の午睡 (ドゥー県の山地)
- 6 秋の海
- 7 波
- 8 追いつめられた牡鹿——雪空の下での乗馬獵のエピソード
- 9 雪の中の鹿の闘い
- 10 雪の中の傷を負った鹿
- 11 波と女
- 12 裸婦
- 13 泉
- 14 3 人の水浴びする女たち
- 15 雷雨の後のエトルタの断崖
- 16 ポール・シュナヴァールの肖像
- 17 静物、鉢に入れたりんごとざくろ
- 18 静物、りんごとざくろ
- 19 サント=ペラジー監獄での自画像
- 20 画家の父レジス・クールベの肖像
- 21 ます
- 22 フルーリエのサン=シュルピス橋
- 23 シヨンの城

本 文

[クールベの芸術] クールベ——行動する芸術家——	阿部良雄	75
ある喪失の物語、あるいは物語の喪失——大作『法話の帰り道』とその運命——	稲賀繁美	82
クールベと硯 伊之助——	中澤 茂	84
作品解説——	阿部良雄	85
年譜——	阿部良雄	96

責任編集 阿部良雄